

マンガ学科 1期生に続け!

公立高で全国初の「マンガ学科」を創設した県立高森高（高森町）で今春、第1期生が卒業した。中には在学中に作品が雑誌に掲載され、プロデビューを目指している卒業生も。充実した教育環境で3年間の学びを終えたプロ漫画家の「卵」たちに続けと、在校生らは日々、研さんを積んでいる。（江崎幸）

公立初創設 高森高の36人卒業

指導充実 在学中に雑誌デビューも

■専門的な指導

「自分の漫画に合うように修正、調整すれば大丈夫ですよ」「キャラクターと（背景を）なじませていってコマになります」。4月23日のマンガ制作の授業で、3年生40人がデジタル技術を駆使した作画を学んでいた。

外部講師のイラストレーターが教えていたのは、イラストソフトを使った背景の描き方。生徒らは色づけや構図の変更も試した。高森高は、「月刊コミックゼノン」を出版している「コアミックス」（東京）などと提携している。同社側が受け持つのは、週30時間の授業のうち254時間。プロの漫画家4人、編集者6人が講師として指導する。

特別講師を招くこともあり、世界的な人気を誇る「キヤプテン翼」の作者・高橋陽一さん、実写化されたことも話題になった「シティーハンター」などで知られる北条司さんも訪れ、講演した。

3年の小屋敷奏菜さん（18）は、同じ志を持った仲間からアドバイスをもらっ

たり、アイデアを出し合ったりできる環境に充実感を感じている。仲間であり、ライバルでもある在校生の活躍は刺激になるといい、「受賞した人を見ると悔しいし、自分の技術の低さを感じて頑張ろうという気持ちになる」と話す。

■初の卒業生

1期生では今年4月までに2人の作品が雑誌に掲載された。そのうちの1人、荒木桜輔さん（18）は、「第11回コアミックス九州国際まんが賞」のサイレント部門で優秀賞に輝き、月刊誌デビューを果たした。

受賞作品のタイトルは「再戦」で、カジキマクロを釣り上げようとして亡くなった父の遺志を継ぐ若者が主人公。霊となった父に支えられ、形見の釣りざおで釣り上げる——というストーリーだ。セリフを入れない作品が同部門の応募条件となっており、画力と登場人物の表情がしっかり表現されていた点が評価された。

荒木さんは在学中を「すごく成長できた3年間」と振り返る。画力の向上に加え、キャラクターの心理を読者に伝える絵の配置などを教わった。プロ直伝だからこそ、身に付いた技術と

いう。現在は崇城大芸術学部（熊本市）で学ぶ。「第1期生として有名な漫画家になり、夢をかなえたい。後輩たちの目標や原動力になれるほしい」と力を込める。

■それぞれの道に

卒業生36人の進路は様々だ。出版社「熊本コアミックス」（高森町）から業務委託を受ける漫画家として2人、契約社員として編集者2人が採用された。4年制の美術系大や短大、専門学校などに進んだ

卒業生もいる。漫画家を目指して入ったとしても、学部中でイラストレーターやアーティスト、編集者など、関心によって進路が分かれていく。

2月に県立美術館で開催した卒業制作展では、生徒の漫画を「買いたい」と申し出た人が少なくとも3人はいったという。担当教諭の緒方泰志・美術教諭は生徒の成長に手応えを感じており、「年間を通じてプロの直接指導を受けられるのは高森高だけ。全国から注目される高いレベルの取り組みを継続していきたい」と話した。